夢の残照

夜空に舞うもの

風野旅人

旅人のザック

表紙・挿絵　Hiroshi

目次

プロローグ

プロローグ

——例えば、夜空に浮かんでいる自分を想像してみる。
素足の下に広がる光の海——街を彩るイルミネーション——それは必死に暗い何かを覆い隠すように光る灯火……
そして、頭上に輝く星たちは街並みから放たれる光で数多くは見えないけれど、それでも幾千を越える星たちが自分達の存在を示すかのように輝きを湛(たた)えている……
その空の中をパラシュートもグライダーも無く、唯々(ただただ)そこに浮かんでいる自分……
「そう、こんな感じ……」
あたしはぼんやりと星々が煌めくその空を眺めていた……
「……って、どーしてあたしが、こ、こんなところにいるのよぉぉぉぉぉぉ————!?」
そう、あたしは確かに『その場』にいた。
あたしの足元には何も無い。
つまり、言葉通り空に浮いているのだ！

第1話　夜空に舞うもの

「……と、取りあえず落ちる心配は無さそうね……」
ひとしきり叫んだ後、あたしは少し冷静になって足元を恐る恐る踏みしめてみる。
そこには何も見えないが、足には柔らかい高級羽毛布団を踏みしめたような、ふわふわとした反発感はあるものの、これより下へと落ちるような感じはみられない。
とりあえず、墜落の心配をしなくても良いことが確認できたので、あたしは改めて周りを見渡してみた。
その視界を遮るものが見当たらないことから、地平線の向こうまで見える高さにいることが改めて思い知る。
そして、眼下に広がる街並みは間違いなくあたしが住んでいる町だ。
「あれはいつも行っている本屋だし……あそこにあるのはこの前服を買った洋品店だし……」
あたしは見下ろす目を皿のようにして、黒く立ち並ぶ街並みから自分の知っている建物を列挙を始めた。
……意外に普段の視界にはあるはずもない、空からの眺めでも建物の判別ってつくのね……って！
「こ、こんなことしている場合じゃなかったぁっ!!」
あたしは自分が通っている高校の学舎(まなびや)を指差したところでようやく我に返った。
「……問題はどうしてここにいるのかと、帰る方法よね……」
今になって気が付いたが、こんな上空に浮いているのに全く寒さを感じないのだ。
本来、上空は強い風が吹いているというけれど、それを肌に感じる事も無い。
今のあたしは、風のない空中で留まっている風船の如くの状態である。
「……分からない……何であたしここにいるの？」
とその時、気付いた事があった。
あたしの服は、薄着……それもパジャマのままであったことだ。
「……と言う事は……」
常識で考えれば一つしかない解答をあたしの頭は導きだす。
「これは夢！　そう夢しかない！」
納得顔でいずこかに向けて高らかに宣言するあたし。
「なぁ～んだ、夢かぁ～」
あたしは笑いながら星空を見上げた。
「きっと寝る前に、星の本なんか読んだからこんな夢を見たのね……えっ……」
その時、あたしの視界の中に星以外の煌めきが映った。

それはふわりふわりと、木の葉のように漂いながらがらあたしに向かって降りてくる。
あたしの目の前まで降りてきた『その輝くもの』に手を差し伸べると、綿毛のような柔らかい感触が手の中に生まれた。
「……羽根……？」
あたしに向かって降ってきたそれは、白に光り輝く大きな羽根だった。
「綺麗な羽根……どんな鳥の羽根なんだろう……」
あたしの手の中に収まったその羽根は、まるで真珠か何かの宝石のような白い輝きを放っている。
その美しさにあたしが見とれている最中、目の端を同じように輝くものが上から下へと次々に通り過ぎて行く。
「……えっ……!?」
慌てて横を振り向くと、通り過ぎてゆくそれらも、今あたしが手にしているものと同じ――光る羽根――であった。
再び上を見上げると、あたしに向かって無数の光の羽根が舞い降りてくる。
「わぁ～！」
あたしは優雅に舞い下りる羽根に両手を広げながら、その光景を見つめていた。
「すっごく、綺麗……」
あたしは煌びやかな光のダンスに溜め息を漏らす。
舞い落ちるその光の羽根は絶えるどころか、次第にその密度を増し、あたしの視界を埋め尽くして行くのだった。
「いったい、どこから降って来ているんだろう……？」
あたしは手で額に庇をつくり、舞い落ちてくる羽根を避けながら、羽根が落ちてくる上空の一点へと目を凝らす。
そして……星の輝く夜闇の空の中で……あたしはそれを見つけた……
あたしを取り巻いている羽根たちが舞い来るその一点には淡色に輝く何かが動いている。
まるで川辺の蛍のように動きまわるそれは、何かの踊りのようだ。
その何かがその場で舞うたびに、あたしの周囲に羽根が満たされゆく。
しかし、ここからではそれ以上の事は分からない。
「う～……　もっと近ければ良く見えるのに！」
あたしは見上げたままもどかしげに呟く。
けれど……次の瞬間……

ぐうっん！

あたしの体は今の場所よりも更に上空へと舞い上がっていった！
まるで巨大な掃除機に吸い込まれるように、強引に上空へと体が引っ張り上げられる。
「のぁぁぁぁぁ――――!?」
しかし、それも一瞬のことで、すぐにスイッチが切られたように急停止すると、再び宙に漂う状態に戻った。
「……さっすがぁ！　あたしの夢！　願えばそのとおりになるのね！」
今の現象は夢の中の一出来事として、即座に片付けるあたし。
……冷静に考えると、いくら夢でもそんな思い通りになるはず無いんだけどね……
取りあえず、この現象についての考察を瞬時にして片付けたあたしは、再び上を見上げたのだが……
「あ、あれ!?　いない!?」
先ほどまであたしの頭上で舞っていた何かはその場にはいなくなっていた。
あたしが上空へと飛ばされていたのは、ほんの一瞬の事だ。その一瞬であたしの視界から消える事が出来るほどのスピードなんて、普通の鳥でも無理だと思うけど……
そう思い、あたしは改めて辺りを見渡した。
「あっ!?　い、いた……」
それは、本当にすぐそば――実に十メートルも離れていない――にいた。果てしなく間抜けなことに、あたしはすぐに気がつかなかったわけだけど……
それは『人』だった。
ただし、人の形をしている何かと言った方が正しいかもしれないけどね……
ぱっと見だけでも、背中に翼が生えていると言うだけで、既に十分普通の人じゃ無いと思うし……
あたしはかたわらで未だに何かを舞っている、『それ』をまじまじと眺める。
真っ白な素肌……よく『雪のように白い肌』っていうけど、この人の場合はあまりにも白過ぎて、透き通るような白……言うなれば白い光みたい……
その肌上には、これまた白い霞のような薄手の服を身に付けていた。
……こんな上空でそんな格好をしていたら、百発百中で間違いなく風邪を拗らせそうだけど、パジャマ姿のあたしがいえる事じゃないわね……
その背中から生えている、これまた例に漏れず白いその翼は、夜空の闇に淡く光を放っていた。
あたしが手にしている羽根もその一部だったのだろう、今もその翼から絶え間無く地上の街並みへと羽根が舞い降り続けている。
そして、儚げで……どことなく憂いを秘めたその表情は、まさしく天使の顔だった。
天使のようなやさしい笑みとは良く言うけど、この人の笑みは、男女分け隔て無く人を引き

付けてやまない何かを持っている。
かくいうあたしも、その笑みを見ていてちょっとくらっとしてしまった。
……あたし……天使が出てくる本とか読んだかなぁ……
軽く記憶を辿ってみるが、ここ最近ではそんな本やアニメ（友人に好きそうなヤツがいるけど）を見聞きした覚えはさしあたってない。
しかし、その天使の神々しさは本物で、あたしは思わず直立不動の体勢のままで、その天使の舞を見とれていた。
しばらく眺めていると、なんらかの定まった舞を舞っているというわけではなく、自分の翼とその手にしている、淡く紅い光を放つ細い糸にじゃれているようにも見える。
そして、素足に届きそうな長い栗色の髪は、その天使が舞う毎に輝く翼の光を受けて柔らかく穏やかな光を添えていた。
……で、すっかりその『天使の舞』に骨抜きにされていたあたしは、いつの間にか『天使』がこちらへと振り向いていたことに気がついていなかったりしたわけだけど……
「……えっ、あ、あう……、ええええええ、えっと……」
一瞬遅れて慌てふためくあたしが発した言葉は、非常に怪しいものとなるのは必然か……
しかし、その『天使』はあたしの奇っ怪な反応にも、何事もなかったようにあたしへとその微笑みを向けていた。
「あはっ、あはははははー……」
その天使の態度に、あたしは思わず乾いたような笑いを返してしまった。
……しかし、この笑みを向けられて「私のために死んでね」なんて言われたら、世の男どもは惜しげもなく命差し出すわね……
今時いないわよね。こんな世俗に歪んでそうもない清楚な女の子なんて……
その『天使』は、今もあたしを見つめ、微笑んでいる。
「……えっと……ここで何してるんですか?」
その笑みにつられて、あたしはめちゃくちゃ間の抜けた質問をしてしまう。
しかし、あたしの問いには答えず、その『天使』は不思議そうに首を少し傾けると、あたしへとスーッと近寄ってくるのだった。
かといっても翼がははためいて飛んできたわけではなく、そのままの姿勢で平行移動でこちらへと近づいてきたのだが。
……これを暗闇でやられたら、冗談抜きで怖いわよ……
『天使』はあたしのすぐ側まで来ると、そっと左手を差し出してくる。
「え……　あ、はいはい……」
めちゃくちゃ罪作りな表情そのままに微笑みかけている『天使』に、あたしも反射的に手を差し伸べてしまう。
……が……
「美琴(みこと)ぉ――――!!」
唐突に響いた声に驚いたあたしは、思わずその差し出した手を引っ込めてしまった。
その声は……あたしたちがいる高さよりもさらに上空から響いてきたのだが……
「だ、誰!?」
聞こえてきた声からすると男みたいだけど。
あたしの目の前に浮かぶ『天使』もその声がした方へと顔を向けていたが、その表情には少しも変化が見られず、先ほどと同じように笑みが浮かべていたのだった。
「ようやく、見つけたぞ!」
その声の主は、あたしたちの頭上から滑るように降りてきた。
あたしと目の前にいる『天使』――美琴(みこと)って呼ばれていたみたいだけど――の近くに降り立ったその男は厳しい顔をこちらを向けて睨めつけている。
当然、直接あたしを睨めつけているわけではなく、単に男の目の前にあたしと天使と直線上に並んでいるためだけどね。
ぱっと見た感じ、その男はあたしとそう年齢差は感じない。しかし、顔の整い具合から若干幼さも感じるくらいだ。
正直なところ、普通に（?）美形と呼ばれる異人族に属している人種だろう。……あたしのこれまでの人生おいて、身の回りにはこれっぽっちも縁のない人種とも言えるが……
そんなうら若き高校生、かつ純真なる乙女の短い人生の中にあった悲しい話は、今はどうだっていいということにしておき、それよりも今現在で重要なことは、その男の背中にも翼が生えているということだろう。
ただ、美琴(みこと)と呼ばれた『天使』とは違うのは、はっきりと翼と分かる形をしている事だ。
美琴(みこと)の翼は、白に輝いており透明感にあふれていて、正に『これぞ天使の翼!』って感じだけど、この男の翼は本物の鳥――そう例えば鷹とか鷲とか――いわゆる猛禽類の翼を模(かたど)っている。
そして、広げられている翼の片方だけでも、その男の身長の二倍くらいあるかもしれないほどの大きな翼であった。
「ち、ちょっと……　あなたはいったい何者よ……!?」
だが、その男はあたしの存在をまるっきり無視して、美琴(みこと)と呼んだ天使の少女を睨めつけたまま口を開く。
「また、こんな所で遊んでいたとはな……」
などと呟きながら、男は無造作に美琴に近づいてゆく。
ところが、対する美琴(みこと)の方は特に気にした様子も無く、微笑みを浮かべたまま手にしている

紅い糸を指で弄(もてあそ)んでいた。
……のだが……

ぽんっ！

やたらと間が抜けた軽い音を立てて、右手に絡められていたはずの紅い糸が突如として……
「な、なんですってぇ!?」
黒光りする銃口を備えた拳銃へと姿を変えていた!?
「ちっ！」
男は舌打ちをすると、即座にその場を飛び退いていた。
あまりの展開に唯一ついて行けず絶句しているあたしを尻目に、目の前でその銃口が火を噴く！

パァーン！　パァーン！

美琴(みこと)はいい加減としか思えない狙いの付け方をしながら、絶え間なく銃の引き金を引いている。
しかし、その顔からは張り付いたように笑みが消えてはいなかった。
それが先ほどまでの優しげな雰囲気と相俟(あいま)って異様さを増幅させている。
掠めながらも何とか銃弾をかわし続けてきた男だが、殆ど流れ弾のような弾丸が直撃しそうになった！
「ちぃっ！」

カァーン！

硬い音を立てて今まさに迫り来ていたはずの銃弾を男は素手で叩き弾く！
嘘っ！
……殆ど……いや完全に常識外れな展開を続ける二人……
あたしは既に傍観者その一に成り下がっていた。
……はずだったのだが……
おもむろに銃口があたしの方向に向けられたぁっ!?
「あ、あたしは全然関係ないわよ――!!」
叫びを上げながら横に逃げようとするあたし。
もはや美琴(みこと)と呼ばれた少女にとって、目の前にいるものすべてが敵なの!?
あたしの訴えをまるっきり無視し（というか聞こえているかすら、その表情からはこれっぽっちも伺えない）、引き金を引こうとする美琴(みこと)。
「やめろ！　美琴(みこと)！」
男は叫びながら美琴(みこと)とあたしの間に飛び込んでくる。
「風よ！　我が命に従いて疾風の障壁となれ！」
美琴(みこと)が引き金を引くより一瞬早く男が呪文のようなものを叫ぶように唱えた。
それとほぼ同時に美琴(みこと)から無数の銃弾が放たれる！

カーンっ！　カーンっ！　カーン！

しかし、硬い金属音のような音を響かせ、男とあたしに向けた銃弾はすべて八方に弾き返された！
美琴(みこと)とあたしたちの間に見えない壁のようなものがあるらしい。恐らくさっき男が唱えた呪文みたいなものは、これを作り上げるためのものだったのだろう。
それを見た美琴(みこと)はまたしても表情一つ変えることなく、手にしている銃を軽く振るうと瞬く間に元の紅い糸へと戻してしまった。
そして……またあの神秘的な笑みを顔に浮かべるのだが……
「あは、あはは……」
「こらそこ！　油断するな！」
またしてもそれにつられて笑いを返してしまうあたしに、美琴(みこと)を見据えたままの男が叱咤を飛ばしてきた。
その時、美琴(みこと)の手に絡みついている紅い糸が再び変化を見せる。
糸は淡い光を放つ玉へと姿を変えると弾けるようにして分裂し、美琴(みこと)の周りでふわふわと漂いはじめた。
一見、大きい蛍が放つ光のような感じがするけど……
「なっ!?　いきなり精霊輝弾(ソウルランチャー)か!?」
光の玉の出現に驚愕した男は、あたしの方を振り向くと、
「逃げるぞ！」
といって、無造作にあたしの手を掴みあげた。
「ちょっ、ちょっと！　どこに連れて行く気よ!?」
とっさに抗議をして睨めつけるあたしに男は、
「死にたくなければ、大人しく掴(つか)まっていろ！」
と一喝する。

バリイイイインっ！

男の声が終わるとほぼ同時に、あたしたちの目の前で激しい光が爆発し、次の瞬間にはガラスが砕け散ったような音を立てて目に見えない何かが崩れ落ちるのを感じた。
「う、うぅ～、目の奥がチカチカする……な、何なのよ、一体……」
至近距離で強い光を浴びたあたしは目を押さえながら呟く。
「さっき作った防壁が壊されたんだ。今のうちにここから離れるぞ」
あたしの呟きに手をつないでいる男が答えた。
その男はあたしの手を引き、美琴と呼ばれた少女と同じようにその大きく広げた翼をはためかせる事無く、夜の上空をもの凄い早さで飛翔する。
……こ、この翼ってただの飾りなのかしら……？
どこからも推進力を得ているようには見えないにもかかわらず、桁外れスピードであたしと男は先ほどまでいた場所からぐんぐん離れて行く。
あっという間に美琴の天使姿が小さな光点へと変わり、その様子を伺うことが出来なくなる。
……でも、後ろから何か別の光るものが追ってきているような気がするんだけど……
「ね、ねえ……あれって……何……？」
あたしは後ろを振り向いたまま、男が背にしている翼の端から見え隠れする輝きを見つめながら問いを投げる。
「み、美琴が放った、精霊輝弾だ……」
男はそれを目で確認することなく、あたしの問いに答えを返してきた。
「そうるらんちゃー……？　なによそ……」
あたしの言葉が終わるよりも早く、翼の陰からあたしの鼻先へと何かが掠め、飛び去っていった……!?
それはあたしの拳くらいの大きさを持った光る物体であった。
「い、今のが……」
あたしは声を震わせて、光弾が飛び去った方向を呆然と眺めながら尋ねる。
「ああ、あれが精霊輝弾だ。まともに食らったら、君くらい一撃で霧散するだろうな」
あたしに向かって右手の拳を弾くように開きながら、とんでもなく恐ろしい事を軽く言ってくれる飛行男。
……つまり、さっきこの男が言っていた『防壁が壊された』というのは、あたしたちを銃弾から守った見えない壁が美琴によって作り出された『精霊輝弾』によって破壊された――ということなのね……
あの銃弾にどれほどの威力があったのかは今となってはわからないけど、それをはじき返した防壁をいとも容易く破壊するほどなのだから、この男の言っていることもあながち間違いとも思えない。
今現在、その破壊力満点の精霊輝弾団体様御一行がその数を倍々に増やしながらあたしたちを追いかけて来ているわけである。
これをピンチと言わずなんと言うべきか……！
「ど、どこまで逃げれば追ってこなくなるのよ――――！」
あたしは懸命に男の手を強く握りかえし、襷の如く風に身体をなびかせながら叫んだ。
「美琴に聞いてくれっ!!」
男は何かを振り絞るかのような調子で吐き捨てるように叫び返してきた。
男の顔を斜め横――二人分の腕の長さは意外と遠い――からのぞき込むと、遙か前方を見据えるその男の唇が強く噛みしめたように白くなっているのが垣間見える。恐らくこんな高速で飛ぶために何らかの力を使っているのかもしれない。その顔には幾らかばかりの疲労の影が伺えた。
「だ、だいたい！　何なのよ！　あんたもあの美琴って子も……こんな常識も物理法則もその他諸々も無視したこのやり取りはっ!!」
しかし、あたしは懸命に引っ張ってくれている男に怒鳴り声を浴びせかけまくる。
後から思えば悪かったと思わなくもないが、残念ながらこの時のあたしは、事情を知ってそうなこの男やその相手である美琴と違って落ち着いていられるような立場ではなかった。
……まあ、そもそも今のあたしもじゅーぶん、物理法則を無視しているかもしれないけどね……
「……普通の物理法則がここには無いと言ったら、この出来事も常識になるよ……」
先ほどとは打って変わって、男は落ち着いたような口調で呟きを返してきた。
「普通の物理法則がない？　じゃあ、ここは……」
あたしの言葉が終わる前に、背後から無数の光弾が追いすがる。
「ま、まずいわよ！　追いつかれているっ!!」
こちらも尋常じゃないスピードで飛んでいるはずなのだが、さすがに弾と勝負するのは分が悪すぎるだろう。
「くっ！　しっかり掴まって！」
「えっ……？　って、きゃあぁぁぁ――――!!」
男は気合いを入れると、唐突に水平飛行から垂直に上昇する軌道に転換した。
当然引っ張られているあたしもその軌道に追従するしかないわけだが、水平方向への反動が残ったまま上昇させられたため、三半規管が壊れそうな気持ち悪いめまいを強引に植え付けられる。
「ちょ、ちょっと！　急に方向転換しないでよ！」
「あ、あれを避け続けるにはまだ足りないくらいだ！　つ、次も行くぞ！」

あたしの抗議をあっさり受け流し、男は斜めに上昇を続ける。
眼下を見下ろすと、先ほどまであたしたちが飛んでいたコースは精霊輝弾（ソウルランチャー）の群れが駆け抜け、その輝線を地平線の彼方までのばし続けているところであった。
確かに上昇しなければ避けきれない状態だったかもしれないけど、出来ればもう少し具体的な予告がほしい……
そのとき、過ぎ去る足下を見つめるあたしの視界の端に再び光弾の輝きが点（とも）る。
「！　こっ、こっちに向け直しているわよ！」
「……わかっている！」
別に砲身が固定された大砲というわけではないのだから、その軸線が変更されるのは予想の範囲内なのだけど……
「ちぃ！　上からもかっ！」
「えっ!?　う、上からぁぁ――――っ!?」
あたしが目を向ける前に、反射的なタイミングで急旋回する男。
またしてもあらぬ方向を見たまま進路を変えられたため、冗談抜きであたしの華奢な三半規管は狂いかけた。
さながらレールのないジェットコースターである。軌道が全く読めないのでどちらに感覚を傾けておけば耐えられるのかすら判断する余裕すらない。
「だ、だーかーらー！　旋回する前に言って――――!!」
あたしは悲鳴混じりの声を上げて進路予測不能な鳥男に抗議を繰り返す。
しかし、完全にあたしの存在を無視したかのように、男は言葉通り縦横無尽に空を翔る。
しっかり握られているとはいえ、この男の細い腕を見ていると遠心力で飛ばされないのが不思議なくらいだ。
だが、目を回してこの腕を放したりしたら、空中に漂うしか能がないあたしはそれこそあの精霊輝弾（ソウルランチャー）の良い的（まと）である。一見頼りなさそうなこの腕とはいえ、あたしにとっては今は命綱に等しい。
紐無しバンジージャンプ――それは既に投身ともいう――をする気なんてさらさら無いあたしは、極めて不本意であるが必死になってその腕にしがみついていた。
とりあえず、あたしは目をつむって周りを見ないことにし、回避行動はすべて男に任せることとする。でないといずれ目を回して振り落とされるだろう。
そんなあたしの葛藤なんぞ思いもよらないであろう、この高速飛行男は光弾の軌跡を巧みな旋回で次々とかわしてゆく。
振り回されるあたしの身になって欲しい……本当に……
だが不思議なことに、目を閉じていると先ほどまで感じていた急旋回に伴う遠心力がほとんど感じられなくなった。

どうしてなのかはわからないし、今それをこの男に確認する余裕なんてない。差し当たって目眩を覚えるようなことが無いのなら好都合だ。今はただこの攻撃から逃れられることを願うだけなのだから。
「量が多すぎる……！　スピードはこれが限界なのに……！」
目を閉じているため音の情報だけが頼りになっているあたしの耳に、風切り音に混じって男の絶望的な台詞が飛び込んできた。
それでも何とかかわし続けているが、それをあざ笑うかのような精霊輝弾（ソウルランチャー）の雨あられがあたしたちを包んでいるのだろう。目を瞑っているあたしにはわからないわけだけど……
「く、くそぉっ！　お、重い荷物を抱えているから……い、いつもよりもスピードが……出ない……！」
「……」

ごちんっ……

重く鈍い音が流れる風の中に消え去ってゆく。
「いってぇ――――！　な、何をするんだ！　いきなり!?」
あたしは無言で男の腕を這い上がると、この失礼極まりない男の頭を握り拳で打ちのめしていた。
「お、女の子に向かって重いなんてどういうことよ!?」
あたしはそのまま男の首根っこを引っつかんで怒鳴りつけた。
「……そ、そんな、細かい事を気にしている場合じゃないっ！」
「な、何ですってぇぇぇぇ!!　あたしにとっては、じゅーぶん大事よっ!!」
そう、それは本当に乙女の重大事項なのである――
「――毎夜、毎夜のお風呂上りに体重計へと両足を乗せる瞬間！　一時を置いてメーターの指し示すその数値！　そして……摂生という名の好きなものを食べることが適わなくなる辛く……辛く過酷な日々の記憶――　くぅぅぅぅっーー！　……お、男のあんたなんかには、一生分からないでしょうけどねっ!!」
あたしは堅く握りしめた拳を振るわせながら、恐怖と苦痛の日々を振り返っていた。
「……いや、確かに分からないと思うけど、そんな力一杯全力全開で力説されても非常に困るんだが……」
なにげに困った顔で頬掻く姿も様になるのは気にくわないわね、コイツは。
「そもそも、普段から摂生しなければならないほど食べているのが悪いん……ぐへぇっ……!?」
鬼の形相でにらめ返しながら、あたしは無礼千万な人体ジェットコースター男の首を鷲掴み、全力でその手の握力を込める。

手足と同時にその翼までもジタバタとはためかせる姿は実に滑稽であるが、男の顔がしゃれにならないレベルで赤青に変色し出したので、手を緩めることにした。
「げっ、げふぉ……み、美琴に倒される前に、君に倒されそうだ……」
これまた失礼な言い草であるが、いつまでもこんなところで立ち話ならぬ浮遊話しているわけにはいかないことは確かである。
「……ともかく、今は君と押し問答している場合じゃない。君がいるおかげでこっちは攻勢に出られないんだから……」
男はやれやれといった感じで、首を堅苦しそうに横に振る。
「な、なによ！　それは！　あたしが邪魔ってこと!?」
「当然だよ。美琴が君を攻撃してきても、それを防ぐ事もできないだろ？」
極めて冷静な口調で言葉を続ける男であった。確かにあたしには何も出来ないことは間違いないのだが、さすがにお荷物扱いはあたしのプライドが許さなかった。
「当然よっ！　あんな常識外れな事、ごく普通のか弱い女の子が出来るわけないでしょうがっ！」
最大限に胸を張って言い放つあたし。
「いや、そ、そんな威張って言われても困るが……」
額に汗を浮かべ、引きつった頬をポリポリ掻きながら本当に困った顔をする男であった。
「ともかく、ここは一体どこなの!?　って言うか、どうしてあたしはここにいるの!?」
あたしは一連の騒動でこれまで口にしてこなかった当然の疑問を未だに困った顔をしたままの男へと投げつける。
「……わからない……」
あたしの質問に小さく呟くように答えると、男はあたしの手を再び握り、虚空へと飛び始める。
「ち、ちょっと！　あなたさっきこの世界がどうこうとか言っていなかった!?」
「俺が知っているのはこの世界の事だけ。君がここにいる理由はこっちが知りたいくらいだよ」
あたしの手を握る力は変わらないが、その言葉は心底疲れたような力のない口ぶりである。
その男の言葉にあたしは沈黙したのだが……
……あたしってどうしてここにいるんだろう……
初めから、そして今も続く疑問だけど、少し冷静になって考えてみる。
ここに来てから……確か、そう夢……夢とあたしは判断したのよね……
あの美琴やこの男と違い、翼もなくこんな夜の空に漂っているなんて、ベッドの上で見る夢以外であり得るはずがない。
あたしはそう結論づけていた。……ただ、その先にこんな騒動に巻き込まれるとは思いもよらなかったけど。
……でも……夢にしては、いやにリアルよね……
天使のような女の子に、まるで魔法のような光の弾による攻撃とそれを防ぐ透明な壁……どれも常識では計れないものばかり。
「……夢……じゃないのね……これって……」
あたしの口からは考えていた事が思わず出てしまっていた。
普段のあたしなら一蹴していただろう言葉だけど、今の今までの出来事は夢の一言で片付けるにはあまりにもリアル過ぎた。
今もあたしたちを標的にして飛び交う光弾を眺めていると、その現実味がさらに帯びてくるのだから不思議なものである。
「……半分あたり。よく気がついたね……」
あたしの言葉を聞いた男が、少し驚いた口ぶりで呟きを返してきた。
「――えっ……？」

バシュウウウウ!!

あたしの軽い驚きの声が、貫くような一条の光と爆裂音によって掻き消された。
「つっ……み、耳がギンギンする……」
至近距離で閃いた爆光と鳴り響いた轟音に、あたしは瞳と鼓膜を持っていかれそうな痛みを感じる。
「やられた……」
突然の爆光に閉じていた目を開けると、あたしの手を放して空中に静止したまま男が顔をしかめていた。
「ど、どうしたの……？　ひ、ひいっ!?」
問うあたしは男が見ていた方へと視線を滑らせ……息を呑む。
そこにはまるで消え去ったかのように半分が無くなってしまった男の右翼が漂っていたのである。
あたしはグロテスクな場面を想像して、反射的に一瞬視線を逸らしてしまっていた。
「だ、大丈夫なの!?」
けれども、そこからは血が吹き出ている様子も無いし、当の男も痛みを訴えているようには見えない。
血まみれのスプラッタよろしく……ということだけは避けられていたけど、それでも片翼が失われているのを見ているのは気分が良いとはいえないわね。
たぶん、あの精霊輝弾（ソウルランチャー）っていう光の弾が翼に当ったんだろうけど……
「ああ、運良く身体には当らなかったから……だけど、この調子じゃそれも時間の問題だろう

けど……」

あたしたちがこれまで飛んできた方角に目を向けると、相も変わらず凶悪破壊力を秘めた光がこちらへと向かってきているのが垣間見える。

照準が適当なのが幸いしてたけど、今みたいに「下手な鉄砲数うちゃ当るの法則」で命中することもこれから高確率であり得るだろう。現にこの男の翼はもがれてしまったわけだし。

「……早く、早くここからも動いた方がいいんじゃないの……？」

あたしは狼狽しながらも、声のトーンを落とし、冷静を装いながら男に問いかける。

さすがに怪我（？）をしている相手に強く出られるほど、あたしは周りが見えていない人間……ではないと信じたいから。

「……そ、そうだね……」

厳しい表情を浮かべながらもあたしの言葉に頷き、男は再び半分にもがれた片翼に視線を戻した。

「取りあえず逃げるには、殆ど支障は無いけど……」

「でも、これじゃ飛べないんじゃ……」

そもそもこの翼、これまで飛んでいる最中も飛行機の両翼のように固定されたままで、羽ばたいている様子は全くなかったけどね。

何の役に立っているのか全然分からない品である。まあ、あたしの方はそもそも翼どころか、パジャマ姿で空に浮かんでいるけど。

「っと、これね。まあこれくらいなら……何とかなるかな……？」

男は折れた翼を自分の近くに寄せ、その手をかざした。

そして両目を軽く閉じると、静かに言葉を紡ぎ出す……

――天空にあまねく風の精霊よ……

我と汝らの盟約によりここに願う……

我と汝らを別け隔つ、蒼穹の地へと舞う力を、今一度我に与えん！

その言葉の内容はまるでというか、ファンタジー小説の一節にでも出てきそうな呪文の詠唱そのままであった。

……というか、どこかで聞き覚えがあるような気がするんだけど……

厳かに呪文を唱え終えた男と、その様子を眺めていたあたしの周囲にどこからとも無く砂金のようにきめ細やかな光の粒子が現れ、あたしたちを取り囲んだ。

「な、なにごと……!?」

音もなく煌めきのみを放ちながら周囲を覆っているそれらの粒子は輝きを伴ったまま、一呼吸置いて徐々に男の折れた翼の先へと集まり始める。

そして、黄金色の粒子はさらさらと砂の流れるような乾いた音を立てながら元の翼の形を作り出すと、その輝きを次々に失ってゆき……

全ての光が消えた後、折れたはずの男の翼は、美琴の攻撃を受ける前の鷲鷹を彷彿とさせる威風堂々とした姿形を取り戻していた。

「ふぅ……これでよし……っと……」

男は一息つくと、すっかり元通りとなったその翼を見つめている。

「こ、これでよし……って、この翼は一体何なの!?」

あたしは、思わず以前の形を取り戻したその翼へと手をさしのべていた。

翼に触れた指先から伝わるその感触は、普通の羽根――たとえばカラスに追い立てられた鳩が道路に落とした羽根とか――とさして変わらない。

先ほどあたしたちを取り巻いていた金色の砂がその姿を変えたものとは思えない。羽根そのものであった。

「これは……自分が空を飛ぶ時のイメージを思い浮かべる時、翼があった方が自然な感じがするから……」

背中越し自分の翼を軽くなでながら呟く、翼人男。

「イ、イメージってことは……これって想像なの!? この空を飛んでいる事が……！」

「そう、君がここに浮いていることだけでなく、闇夜の町並みも、この翼も、あの光弾も……すべてが想像の産物……」

☆

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！ あんた、さっき『夢じゃない』って否定していたじゃないの！」

ほんのついさっき、男はあたしの『夢じゃないのね』という言葉を認めていたのである。にもかかわらず、次の瞬間に『これは想像の産物』などと言われては丸っきり話がどこの山とも谷とも噛み合わない。

空を飛びながらも男はきょとんとした顔であたしを見つめ、ややあってから納得したように「ああ」と呟いた。

「その話、詳しくしている余裕が無かったから、ちょっと適当に答えていたけど……この世界は……夢の世界だよ。ただし、さっきも言ったとおり、それは『半分だけ』」

「何よ、その半分だけって……？」

あたしの疑いのまなざしに、男は少し思案顔になってから口を開いた。たぶん、言うべきか言わざるべきかを迷っていたように思える。

その様子から別にあたしをからかっていた、というわけではなかったことだけは悟ることは

出来たけど。
「……この世界のことは……俺にもまだよく分かっていないところが多いんだ。ただ一ついえることは、今俺たちがいるここは『現実に影響がある夢』ということ」
「『現実に影響がある夢』……？」
あたしのオウム返しに男は頷きを返したものの、それ以降、口を開くことは無かった。
……現実に影響を及ぼすことがある夢って……いったい何なのよ……
まさか、ここで怪我したら現実も怪我しているとでも言いたげな表現にしかあたしには聞こえなかった。
そもそも、ここが夢ならば……一体これは誰の夢なの？
あたしでなければ、この男……あるいは……
こうしている間、先ほどまであたしたちを追ってきていた、無数の精霊輝弾（ソウルランチャー）の光は一時（いっとき）の夕立のようにピタリとやんでしまっている。
どうしてだかは分からないけど……もしかしたら、先ほどこの男に命中したことを察して、撃墜したのかと思っているのかもしれないわね。
「撃ってこなくなっちゃったわね……」
「さっきので手応えを感じてくれたか、単に休憩しているだけか……」
あの精霊輝弾（ソウルランチャー）と呼ばれる光の弾は、この男の背に生えている見た目は頑丈そうな翼を一瞬にして消滅させてしまうよう代物である。
もし、あんなのがあたし自身に直撃でもしたら、この男の言うとおり一撃で霧散することになるだろう。
……想像したくない……
あたしは、先ほどのもがれた翼を思い出して軽く体を震わせていた。
「怖い……？」
「あ、当たり前よ！　いつ自分の身にあんなのが当たるかと思えば……」
「……その割にはずいぶん威勢のよ……いや、何でもない……」
少しは学習したのか、失言を途中で切り上げる男。しかし、途中まであたしの耳にはしっかりと聞こえていたので、後でまとめてお支払いすることにする。覚えてろ。
「ともかく、君をここから帰す事を先に考えた方がいいみたいだな……」
「……って、それを先に考えるのが普通でしょうがぁ!!」
またしても、あたしは男の襟首を引っ掴んで左右に捻（ね）じった。早くも貯蓄をお支払いすることになったようである。
「ま、また……か……や、やめ……く、くるしひ……」
冗談抜きに入っているらしく、再び男の顔色は赤く青くと変色を繰り返すこととなる。
「あなた！　絶対あたしの事をちゃんと考えていなかったでしょう！」
この優男風鳥男のこれまでの行動を見ていると、普段は温和で通っている――はずの――あたしでも殺意が目覚めるのである。
とはいえ、ここで絞殺してしまうと非常にあたしが困ることになるので、取りあえず手を緩めておく。
さっきほどのように翼を壊されても修復できたことといい、この男は多少のダメージを受けても生き残れる自信があるからなのか、イマイチ緊張感に欠ける言動が感じられる。
「は、はぁ……はぁ……　み、見掛けによらず力が強いな……君……」
「んな事よりも、あたしをここから帰す方法あるんでしょうね!?」
両目の端を吊り上げ、緊張感のない男を睨むあたし。
「……と言うか、普通ならもう帰っていると思うんだけどな……」
男は先程まであたしの手によって締まっていた首をさすりながらぼやく。
「帰ってるって……どういうことよ……」
「いや、普通の人なら最初に美琴（みこと）に襲われた時で元の世界に帰っているはずなんだけどね……」
男は虚空を見つめたまま、あいまいな返事を返した。
「襲われた時点で……って……？」
あたしの問いに答える前に、男はその場に急停止した。
当然、手を引っ張られているあたしもその場に釘付けにされたわけだけど……
「ど、どうしたの？」
あたしの問いに答えるよりも先に男は、あたしを……
「きゃぁ!?」
あろうことか抱き寄せたのだった！
「ちょ、ちょっと！　ま、待ちなさい！　いったい何をする気よ!!」
至近距離に顔を近づけられたため、あたしは顔を真っ赤にしながらジタバタとその場で藻掻（もが）いていた。
腐っても（？）顔だけは良い男なので、気にするなと言われても無理な相談である。
……まあ、顔が悪かったとしても、ほとんど同じ行動を取ったであろうということは容易に想像できるけどね……
「じっとして頭を下げて！」
男は振りほどこうとするあたしを一喝する。そもそも予想外に強い力で抱きしめられていたので、振りほどくことなど出来なかったけど。
「美琴（みこと）……!!」
あたしを抱えながら、男は歯ぎしりを交えた厳しい言葉を吐き出した。
「なっ!?」
男は抱き寄せたあたしの方など見ておらず、先程まで何も無かったはずの目先の空間を睨め

つけていた。
　あたしは男に抱き寄せられたまま（非常に不本意）振り向いたその視線の先には、まさに発射準備が完了している多数の光――あの精霊輝弾（ソウルランチャー）とかいう光弾――を従えた一人の天使が、いつの間にかあたしたちの前に立ちふさがっていた。
　初めて見た時に浮かべていた微笑みを顔に貼り付けたままの少女――美琴（みこと）があたしたちの進路を阻むように浮かんでいたのである。
「い、いつの間に……!?」
「ちっ、俺たちが漫才している間に先回りされていたか……！」
　この期に及んで軽口を叩いている余裕なんてこれっぽっちも無いはずだが、それが逆にこちらには余裕がないことを表している。
　あたしと男の驚愕の呟きが終わるかいなかの刹那、淡い光の翼を背にして佇（たたず）む美琴（みこと）はその白く透き通ったか細い腕をあたし達の方に振り下ろしていた。
　それを合図にして、美琴の周りを漂っていた光弾があたしたちに向かって一斉に殺到する！
「いやぁ……！」
「くっ……！」
　至近距離での直撃を覚悟したあたしは、男の胸へと顔を預けていた。

ザシュッ！

「あ、あれ……？」
　しかし、何かが抉（えぐ）られたような音が響いただけで、あたしは何とも無かった。
　背（そむ）けていた顔を上げて美琴（みこと）の方を振り向くと、鷹を思わせる巨大な翼があたしと男を包んでいる。
　これが美琴（みこと）とあたしたちの間を遮蔽して精霊輝弾（ソウルランチャー）の雨あられを防いでいたのだった。
　翼の外側からは『ザシュッ、ザシュッ』という不気味な衝撃が無数の羽根越しに伝わってくる。
「ちょっとっ！　こんな事が出来るなら早くやりなさいよ！」
　しかし、あたしの言葉に男は何も答えない。決して無視しているのではなく、答える余裕が無いのだ。
　左手のひらを翼へと向け、男は額には大粒の汗が浮かび上がらせながら、悲痛なほど顔を歪ませて歯を食いしばっている。
「……意識を集中……集中して、翼に力を込めていれば……これくらいはなんとか……」
　さっきは精霊輝弾（ソウルランチャー）にこの翼は耐えることが出来なかったが、今は男が『力』を集中しているからこそ、なんとか耐えしのぎ、そして防御壁として使うことが出来ているのだろう。
　当然、それだけ男に負担がかかっていることは考えるまでもないことだった。
　もし、この場で男が力尽きたりしたら……あたしの頬には冷たい汗が滴（したた）り落ちる。
「あたしが帰ることが出来れば……」
　あたしがこの場から離れることが出来れば、この男はあたしの事を気にせずに戦うなり、逃げるなりが出来るのだ。
「……どうやったら帰れるの……？」
　あたしは男の左腕に抱き留められながらその顔をのぞき込むと、男の茶色かかった柔らかい毛先があたしの鼻先に触れる。
「……」
　しかし、あたしの問いには答えず、男は無言で意識を翼に集中していた。
　とても答えを返せるような状況じゃ無さそうね……
「……方法は……幾つかあるけど……」
　ややあってから、顔を青ざめさせるほど力を使い続けている男は呻（うめ）くように言葉を絞り出す。
「どんな方法？」
「……要は君が意識を失いかけるほど驚けば良いんだよ……この世界はあくまで『夢の世界』であることには変わりない。だから君が目を覚ませば……」
……驚く……って……
「いや……あたしはさっきから命の危険に晒（さら）されまくって、驚きっぱなしなんだけど……」
　今の今まで悲鳴を上げっぱなし、驚愕しっぱなしなのである。男が言うように驚くだけでこの世界から去ることが出来るというのならば、既に帰っているはず。
　この男はさっき「美琴に襲われた時点で帰っている」と言っていたのは、普通はその驚きで目を覚ましているという事だったのだろう。
　しかし、それでも帰れないあたしは一体……
「……にもかかわらず、この世界から君が離れることが出来ないのは……よっぽど神経が図太いか人なのか……別の理由かも知れない……」
　懸命な表情を浮かべながら、男は翼に力を込め続ける。
　『図太い』という言葉にあたしは多少こめかみを引きつらせたが、男の話の腰を折っている状況でも無いので、華麗に無視する事にした。
……後で覚えてろ……
　こうしている間にも、光弾が絶え間なく翼へと叩きつけられている炸裂音がその場を支配している。
　翼に遮られて美琴（みこと）の様子は伺えないものの、あの笑みを貼り付けたまま、次々と弾を生み出して撃ち放っているのだろう。
「……な、なんとか君を驚かせられれば……あ……」

ハッとしたような顔をあたしに向け、声の調子をさらに落として言葉を紡ぐ男。
「……方法はある……俺のポリシーに反するけど……たぶんこれなら……」
「……あなたのポリシーっていうのは、これっぽっちも当てにはならなさそうだけど……どんな方法……？」
何か良い案が浮かんだようだけど、如何せんこの男が思いつくような方法である。ロクでもないことである可能性は十分あり得る。
「そ、それを言ったら効果が無いよ……どうする？」
確かに『あたしを驚かせる案』なのだから、あたしに伝えてしまってはその効果は薄れてしまうだろう。
とは言っても、予告有りで何をされるか分からないというのは、極めて判断に困る話ではある。なので「どうする」と言われても……
しかし、ここで断れば少なくともあたしには帰る手立てはないことになり、この訳の分からないところでこの男と心中する羽目になる。
それだけは……それだけは、絶対に！　絶対にいやだ！
こんな見た目はともかく、見知らぬ男の腕の中で力尽きるなんて真っ平ごめんである。いや、知り合いでも嫌なものは嫌だけど。
この男の考えたあたしを驚かせる方法というのは非常に怪しいし……と、あたしはしばし半ば堂々巡りになりかけながらも思考を巡らせていた。
「ぐ、ぐっ……」
あたしが迷っている間も男は歯を食いしばりながら、美琴（みこと）の攻撃に耐えている。
いつまでもこうやって耐えきれるわけじゃない……！
「わ、分かったわ！　あなたの案……ちょっとどころかかなり不安があるけど、採用することにする！」
その苦しげな表情を見てあたしは決断した。もはや完璧にヤケである。
ヤケの結果が逃げる方法であることなのがあたし的に非常に抵抗があるけど、今までの状況を鑑みても足手まといであることは明白なのだからいつまでも意地を張らず、ここは戦略的撤退ということで無理矢理自分を納得させた。
「悪い……ね……取りあえず痛みは無いはずだから大丈夫だと思う……覚悟は……しなくていい。効果が薄れると困るから……」

ドオゴオオオオオオ――――ンっ!!

そのとき、ひときわ大きな衝撃があたしたちを襲った。
「のぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――!?」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ――――!?」
あたしと男は同時に叫び声を轟かせ、その場からはじき飛ばされてしまう。
あたしたちを守っていた翼が美琴（みこと）の猛攻に耐えきれず、強引にこじ開けられてしまったのだ。
「ひやぁぁぁぁ――――!!」
クルクル……と、まるできりもみ状態で落下する飛行機のようにあたしは夜空に投げ出され、少しの間あらぬ方向にその身を飛ばされていた。
あ、あの男は!?
先ほどの衝撃であたしと男は引き剥がされている。このままではあたしは完全に無防備なままであり、こんなところを美琴（みこと）に狙い撃ちされたら……！
案の定、美琴（みこと）はその隙を逃してはくれなかった――
「き、君――!!　や、やめろっ！　美琴――！」
男の叫びもむなしく、美琴（みこと）はまだ残っていた精霊輝弾（ソウルランチャー）をあたし目がけて解き放つ。
次の瞬間、あたしの目の前には光の弾が迫ってくる。無論、あたしの移動速度では避けられるようなスピードではない。
そして、光があたしを包み込み、視界が真っ白に染まった瞬間、もはやこれまで……と目を閉じて覚悟したのだが……

バスウウウウ――――ンっ！

ド派手は音を立てて光球が炸裂した……のだが……
「……ん？」
いつになっても音だけで衝撃が来ないので、恐る恐る目を開けたあたしは自分の体を見下ろしたのだが……なにも変化は無かった……
「あ、あれ？　な、なんとも……ない……？」
痛みがすぐに感じられないほど激しく身体を破壊されたわけでもなく、本当になにも起きていない。間違いなく直撃のはずだったのに。
あの精霊輝弾（ソウルランチャー）の威力は男の翼を易々と折るほどなのだ。あたしの華奢なボディではとても耐えきれたものではないだろう。それなのに傷ひとつ付いていないなんて。
「……ど、どういうこと!?　い、一体なにが……起きたの……？」
無傷のあたしを見て驚き戸惑っているのはあたしだけではない。
放った本人である美琴（みこと）の方も表情は相変わらずだが、明らかに戸惑った様子でその動きを止めており、精霊輝弾（ソウルランチャー）と化していたはずの紅い糸が美琴の手の中に収まっていた。
しかし、このとき動きを止めなかったヤツがいた。一人だけ……

「い、いまだ――――！」
「――――えっ？」
あたしから少し離れたところに飛ばされていた男は、目にも止まらない早さでこちらへと飛んでくると漂っていたあたしの肩を強引に引っ掴んで抱き止める。
……な、何を……!?
――あたしは、この時目の前にいる男が何をしようとしていたのかをキチンと考えるべきだった――
「……えっ……？」
なんの前触れも無く行われた一連の出来事は、あたしにとって初めてのことだったので『その事』をとっさに理解することができなかった。
自分の唇に今まで感じたことない柔らかな違和感を感じた瞬間、あたしの意識は陶磁器のように真っ白に塗りつぶされた空間へと放り出される……

☆

「はわわわぁぁぁぁぁぁ――――――――――!?」
あたしは自分の上に覆い被さっていた白い何かを跳ね除けてその場から飛び起きた。
「はあ……はあ……はあ……」
息が荒い……というか苦しい……
あまりにもあんまりな出来事に、あたしは息をすることも止めてしまったらしい。
――――って、
「ここは……どこ……？」
上半身だけ起こしたあたしは、自分の首から下の姿を垣間見る。
服装は……さっきまでと同じパジャマ姿のまま、だけど……
一旦、正面を向いてから首をゆっくりと左右に振り、あたりを見渡した。
「あ、あたしの部屋……？」
ここは夜の上空ではなく、正真正銘、あたし――水月晶（みつきあきら）の部屋である。
ふと振り向くと、ついさっきまであたしの頭が横たわっていたであろう枕の横には、昨晩、寝る前に眺めていた星野写真――星雲星団の写真のこと――が掲載されている本が転がっていた。
そしてベッドの下には、今し方あたしが跳ね飛ばした物――羽毛の掛け布団――が床へとずり落ちている。
急に起きた反動か、寝起きにしては神経がすこぶる高ぶっており、いつもはさして気にならない時計が時間を刻む機械音がいやに大きく響いて聞こえているこの部屋は――間違いなくあたしの部屋だ――
……という事は……
「ゆ、夢……オチかい！」
白地の天井に向かって、誰とも無く突っ込みを入れるあたし。
まあ、あんな出来事、夢で良……くない!!
「ゆ、夢とはいえ、このあたしの……純粋可憐なる乙女のファーストキスを無理矢理奪うなど言語道断！　今度会ったら首を絞めるどころじゃ済まさないわよ!!」
今さっきまで見ていた夢に『今度』があるかどうかは分からないけどね。
……それにしても……
「みょーに、リアリティに溢れた夢だったわね……」
あたしは膝の上に残っているカラフルなタオルケットに向け、深く、深くため息を吐いた。
まったく……夢見の悪さで疲れるなんて初めてよ……
だいたい、夢なんて見てもすぐにその内容を忘れてしまう事が多いのに、今日の夢はほとんど全部覚えていた。
「ま、夢で良かったという事にしておきましょう……」
最後の部分は記憶から本気で抹殺したいけど、天使に追いかけ回されたり、妙な男と逃げ回ったりするなんて、夢の中で十分だから。
あたしは誰ともなく呟くと、ベッドから落ちていた掛け布団を引っ張り上げ、それを被って再び眠りに就いた。
まだ目覚まし時計が鳴っていない時間ならば、優しく二度寝へと誘（いざな）う、文明人には防御不能な魅惑の魔法（マジック）アイテムこと『柔らかい羽布団』に包まれていても大丈夫……のはずなのだが……
「はれ？　窓の外がやけに明るいような気がするんだけど……」
遮光性が高いカーテンの隙間から漏れる日差しは、部屋の奥まで照らすには十分な光量を持っていた。
あたしは、ベッド横の出窓に置いてある時計を手に取り、針の指し示す位置を読み取る。
その針の位置は、長い方が十二、短い方が八……？
あたしの寝ぼけた頭がその時刻を正確に認識する前に、部屋のドアがコンコンと少し強めに叩かれた。
「あきら～？　そろそろ起きないと遅刻するんじゃないの？」
いつもなら既に朝食を終えている時間にもかかわらず、起きてこないあたしを起こしに来たお母さんの声が部屋に響く。
「……」

「なぁぁぁぁぁ!?　ち、遅刻するぅぅぅぅぅぅ――――!!」
あたしは掛けたばかりの布団を跳ね上げるとベッドから飛び降りた。

そして、今日も慌ただしく普通の日常が流れ始める……

第１話　完

夢の残照

２０１０年　３月２２日　初版発行
２０１０年　５月　４日　第二版

奥　付

発行元　　旅人のザック
著者　　風野旅人
URL　http://www.din.or.jp/~tabito/
E-Mail　tabito@din.or.jp

イラスト　Hiroshi
URL　http://www.pixiv.net/member.php?id=411935
E-Mail　ryo_cho_@fstnet.or.jp

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『朱鷺魅』を使用しています。